

オルフ教育におけるアクティブ・ラーニング¹の一考察

—大学生を対象とした授業実践の取り組み—

本多 峰和

愛知学泉短期大学

A Study of Active Learning in Orff's Education Work on Classroom Practice for University Students

Miwa Honda

キーワード：オルフ教育 Orff's Education、アクティブ・ラーニング Active Learning、
音楽教育 Music Education

1. はじめに

2012(平成 24)年 8 月 28 日の中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～(答申)」ではアクティブ・ラーニングを「能動的学修」とし、学生の主体的な学修を促す質の高い学士課程教育を求めている。2015(平成 27)年 12 月 21 日「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」ではアクティブ・ラーニングの視点からの授業改善やアクティブ・ラーニング型研修への転換が教員や教員養成などに求められており、2016(平成 28)年 12 月 21 日「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」では、「主体的・対話的で深い学び」の実現(「アクティブ・ラーニング」の視点)」と記載されている¹。このように、教育政策においてアクティブ・ラーニングが積極的に推進されており、様々な音楽教育現場でもアクティブ・ラーニングへの取り組みが模索されている。

こうした取り組みに対し、オルフ教育の理念を柱とするワークショップ型授業実践では、アクティブ・ラーニングである「能動的学修」が行われているのではないかと考えられた。この授業実践は、ヘルマン・レーグナー(Herman Regner, 1928-2008)

(以下レーグナー)の解釈するオルフ教育の理念²より、①「音楽、踊り、言葉、そしてその他の芸術を一つの分野として認知する」②「『音楽を楽しむ』ということは、個人的な体験だけでなく、グループ体験でもあるべきである」③「音楽教育では、誰もが創造的に音楽に取り組んでいけるようにしなければならない」という 3 つの理念を柱としている。

本研究では、3 つのオルフ教育の理念を柱とする授業実践を考察し、学生がどのように能動的、主体的に学んでいるのかを探索的に把握することを目的とする。

(1) オルフ教育

オルフ教育とは、ドイツの作曲家であり、教育家であったカール・オルフ(Carl Orff, 1895-1982)(以下オルフ)が提唱した教育である。オルフ教育にはメソッドやシステムがなく、オルフ・シュールヴェルクと呼ばれる作品群を通してその中に含まれる理念の解釈が求められる。

本研究ではオルフと共に長年オルフ研究所で教鞭をとり、オルフの最も身近な協力者であり元オルフ研究所所長であったレーグナーの解釈するオルフ教育の理念に基づき保育者養成校での実践研究を行う。

(2) アクティブ・ラーニングとは

中央教育審議会の 2012(平成 24)年 8 月 28

日「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」用語集ではアクティブ・ラーニングを「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である²⁾。」と定義している。そして、(学士課程教育の質的転換)において

「生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力を持った人材は、学生からみて受動的な教育の場では育成することができない。従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要である。すなわち個々の学生の認知的、倫理的、社会的能力を引き出し、それを鍛えるディスカッションやディベートといった双方向の講義、演習、実験、実習や実技等を中心とした授業への転換によって、学生の主体的な学修を促す質の高い学士課程教育を進めることが求められる。学生は主体的な学修の体験を重ねてこそ、生涯学び続ける力を修得できるのである³⁾。」と述べられている。

アクティブ・ラーニングについて溝上（2015）は「一方向的な知識伝達型講義を聴くという（受動的）学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと。能動的な学習には、書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う⁴⁾。」と定義した上で次のように考えを述べている。「アクティブ・ラーニングは、それまでの一方向的な知識伝達型講義（教授パラダイム）での聴くという学習を受動的学習と見なし、そうではないという意味での能動的な特徴をもって、学習パラダイムを支える学習として提唱されている。」「書く・話す・発表する等は、一方向的な知識伝達型授業の『聴く』を乗り越えるために示されている具体的な活動例であり、ここに教授パラダイムから学習パラダイムへの転換の含意が、活動レベルで示されている。そして、書く・話す・発表するなどの活動を学習に採り入れ、それに関与するということは、学生にと

って、ただ聴くだけのときにはあまり働かせていなかったさまざまな認知機能を働かせ、そのプロセスを外化することを意味する。」「受動的学習という基準から見て能動的な特徴を示す学習とは何かと答えると、それは、一方向的な知識伝達型講義を『聴く』という学習を乗り越えて、書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う学習のことである、となる。少しでもこの特徴を持っていれば、アクティブ・ラーニングだと呼べることになる。」⁵⁾

音楽の授業においては、「書く」ことは音符を書くことであり、「話す」ことはアンサンブルや器楽演奏など言葉だけではなく音を通して意思疎通を図ることである。「発表する」ことは歌やリコーダー演奏など人前で発表するなどである。このように考えると音楽の授業ではすでに能動的な学習はなされていると思われる。しかし、心から音楽を楽しみ学んでいるのだろうか。

2015年5月～7月にかけて日本音楽教育学会が小・中・高校生を対象に『『音楽についてこう思う!!』『音楽について言いたい!!』学習者アンケート』と題してWeb調査を実施³⁾している。その中の、質問項目Ⅱ・(2) 1:「音楽の授業について（自由記述）」の中学生の記述で否定的回答として「ぼくは音楽が大好きです。でも音楽の授業は大嫌いです。特に合唱が嫌いです。美しい声ばかりを求められるからです。美しい声ばかりが歌じゃない、むしろ世間ではそっちが少数派かもしれないというのに地声で歌うと怒られるのです。あと楽譜通りにしろと強制されるのも嫌いです。では、なぜぼくは音楽が好きか。それは音楽は芸術だからです。作曲が大好きで自由に歌っています。友達と音楽ユニットを作って自由に歌っています。自分の言いたいことを表現したりできるからです。音楽の授業ってなぜこんななのだろう、と疑問に思う日々なのです⁶⁾」とある。また、質問項目Ⅴ・2:『『音楽についてこう思う!!』『音楽について言いたい!!』こと（自由記述）」の中学生の記述でも「音楽は楽しいものです。しかし音楽が嫌いな人がたくさんいます。嫌いなら、やらなきゃいいんです。楽しいと思うなら徹底的にやるべきです。生きるためには、音楽は絶対必要ではありません。しかし音楽の授業を受けることが義務付けられている。ぼくは学校なんかに音楽が嫌いな人を作って欲しくないんです。音楽教育学会さん、よ

ろしく願います。音楽は耐えるものではない。人間の娯楽なのですから⁷⁾ さらに高校生の回答の中にも「音楽の授業面白くない」「もっといろんな人が音楽を好きになってほしい」⁸⁾などの記述も見られる。中学生の「音楽の授業は大嫌い」「楽譜通りにしろと強制される」「音楽の授業ってなぜこんななのだろう、と疑問に思う」「音楽が嫌いな人がたくさんいます」「音楽の授業を受けることが義務付けられている」「音楽は耐えるものではない」このような否定的な言葉を指導者は重く受け止めなければならないのではないだろうか。音楽の授業において、まず「音楽は楽しい」と思うことが大切であろう。

音楽をアクティブ（能動的、主体的）に学ぶということは、まず音楽を「楽しい」と感じ、さらに創造性豊かに音楽と関わることではないだろうか。

以上のことから本研究では、音楽を心から楽しみ、創造性豊かに音楽と関わりながら、能動的、主体的に音楽を学ぶことを音楽教育におけるアクティブ・ラーニングとする。

2. オルフ教育の3つの理念とアクティブ・ラーニングとの接点

レーグナーの解釈する3つのオルフ教育の理念と、それに関するレーグナーの解説を筆者が要約し、アクティブ・ラーニングとの接点を探る。

①「音楽、踊り、言葉、そしてその他の芸術を一つの分野として認知する」

レーグナーは、「子どもにとってこれら（音楽、踊り、言葉）はまだ分化されていないもの、そして本来の音楽、動き、演劇、絵画、造形などは、現在、学校でなされているものより互いにもっと密接な関係にあるものであり、それらは本当は別々に教育されるものではない⁹⁾。」と述べている。

ここでは音楽だけ、と限定されるのではなく、芸術という広い視野の中で音楽と能動的、主体的にかかわることが大切だと考えられるのではないだろうか。

②「『音楽を楽しむ』ということは、個人的な体験だけでなく、グループ体験でもあるべきである」

レーグナーは「協同体の生活の中で、どのように音楽と関わっていったらよいか、見つけていくこと

であり、音楽とは、『誰かと何かを分かち合う』ということでもある」また「グループの中で何かをするということは、他人に対する私の目、耳、そして心を開かせる」¹⁰⁾。と述べている。

グループの中で自分の考えや思いをどのように伝えるか、またお互いを尊重しながらグループ活動を行う過程で「いかに学ぶか」が大切であり、学ぶ姿勢、態度などグループ活動を通して育むことができるであろう。グループにおける他者との相互作用や互恵的な協力関係において、主体的に考える力や能動的な学習につながると考えられるのではないだろうか。

③「音楽教育では、誰もが創造的に音楽に取り組んでいけるようにしなければならない」

レーグナーは「もし子どもが彼自身のメロディーを美しいと思うなら、それをそのまま批判せず、認めてあげることが大事」であり、「作品を作る過程も大事」である。そして「子どもが自分の力で何かを作っていくことによって、想像性や創造性を養っていくことができる」¹¹⁾。と述べている。

「それをそのまま批判せず、認めてあげることが大事」このことは、自己肯定感を育むと考え、能動的、主体的な学びにつながるものと思われる。「自分の力で何かを作っていく」この言葉からも、能動的、主体的な学びが伺われるのではないだろうか。「作品を作る過程が大事」という言葉からは、試行錯誤しながら能動的に学んでいくプロセスが大事であると捉えられるであろう。

このようにレーグナーの解釈するオルフ教育の理念を考えると、アクティブ・ラーニングにおける「能動的な学び」や「主体的な学び」とつながる要素が多く見受けられる。

3. 実践研究の方法

対象：N大学の幼児保育学専攻の女子学生
2年生、40名

期間：2015年4月16日から7月16日

演習授業名：「保育の表現技術Ⅱ

《創造的音楽表現》

1コマ45分授業（1コマ20名）2コマ分

計14回（第1回～第14回）

4. 授業内容

(1) 授業のねらいと主な授業内容

表 1

	ねらい	主な授業内容
第1回	身体コントロール	楽器の音やリズムを用いて歩いたり止まったりする活動。
第2回	身体で音を感じる	楽器を使い音の響きを身体で感じる活動。
第3回	身体コミュニケーション	自分の身体と他者の身体を意識しながら動く活動。
第4回	身体の動きを意識する	既成曲から動きをイメージする。
第5回	音と動きの関係	音と身体の動きを意識する活動。
第6回	声あそび	絵本から母音「あ」の歌を創る活動。
第7回	オルフ楽器の扱い	動く素材の動きをオルフ楽器で表現する活動。
第8回	言葉あそび	擬音語や擬態語のアンサンブルを作る活動。
第9回	楽器(身近な日用品)	身近な日用品から様々な音を見つける活動。
第10回	素材遊び(石)	石を使いアンサンブルをする活動。
第11回	図形楽譜	絵本を参考に図形楽譜を描き声と身体で表現する活動。
第12回	ボディパーカッションⅠ	手拍子だけでアンサンブルを行う活動。
第13回	ボディパーカッションⅡ	自分で発見した身体の音を使い、アンサンブルを行う活動。
第14回	作品発表	授業で行った表現活動を参考に5名～7名で2～3分の作品発表を行う。

(2) 学生のレポートとオルフ教育の理念との接点

この授業では「授業を振り返って思うこと(自由記述)」と題し学期末のレポートを課題としている。40名全員の記述から、3つのオルフ教育の理念とつながるとされる代表的な記述を示す。(下線は筆者)

① 「音楽、踊り、言葉、そしてその他の芸術を一つの分野として認知する」

- ・自分が子どものように力いっぱい体を動かすことで子どもも音やリズムに合わせて体を動かすことが楽しいと思ってくれると思う。
- ・不思議な言葉でアンサンブルするのも楽しかったし、これなら、子どもたちでも楽しんで活動できると思った。
- ・ピアノやバイオリンなどの既成の楽器がなくてもハーモニーが奏でられることがわかりました。
- ・ただ楽器や歌に触れさせるだけでなく、身近なものの音を子どもたちにも知ってもらうことで音楽の想像力を高めることができるのではないかとと思う。
- ・人の動きに合わせて音を鳴らしたり、体でいろいろ

ろな形や音を表現したり、「あ」だけでいろいろな感情を表現したり、身近にある食器や石を使ってアンサンブルしたり、私の中にある音楽の世界を知ることができた。

- ・最近まで、音楽とはただ教えられた通りに歌ったり、演奏したりして、上手くできるかどうか、美しく聞こえるかどうかだと思っていた。しかし、音楽とは心と身体の全身を使って感じ表現するものであるということに気づいた。
- ・今まで私が受けてきた音楽の授業は、みんなで一緒に歌ったり、楽器を演奏したりというものだったので、この創造的音楽表現という授業にはとても驚いた。この授業なら、音楽が嫌いな子や苦手な子でも楽しむことができるのではないかと思った。
- ・音楽の授業という、歌ったり楽器を使って何か曲を演奏するということが多かったので、創造的音楽表現の授業はとても新鮮で毎回来しみだった。

上記学生の記述からは、動きや言葉、そしてピアノなど既成の楽器を使わなくても音楽ができること、また音を聴くことも大事だということに気づいていると思われる。これは、絵本や石、身近な日用品などを使い音楽へと発展する経験をしたからであろう。そして今までとは違う音楽に対する概念や興味が広がり、さらに保育者としての観点も養われていたことも見受けられる。レーグナーの解釈するオルフ教育の理念である「芸術を一つの分野として認知する」この言葉の芸術は、芸術作品とよばれるものだけではなく、身の回りの良いもの、美しいものを感じることも含まれるのではないだろうか。リード(1955)は、芸術の本質的要素は感受性だと思われると述べている¹²⁾。学生は授業の中で様々なことを感じ、能動的、主体的に音楽と関わっていたのではないだろうか。

② 「『音楽を楽しむ』ということは、個人的な体験だけでなく、グループ体験でもあるべきである」

- ・グループのみんなで色々な案を出しあって、まとまりのある音楽ができて満足した。
- ・クラスのみんなと協力して音を楽しむことができ

ました。

- ・グループでそれぞれのイメージを1つにする素晴らしさを感じた。
- ・あらゆる感覚を使って音楽を感じる経験をし、みんなとお互いの感性を尊重しあうことができたと思う。
- ・グループで演奏する時、自分が演奏するのも楽しかったけど人の演奏を聞くことも好きでした。
- ・みんなで音楽の楽しさを共有することができて感動しました。改めて音楽が好きだと実感しました。
- ・音楽はたくさんの人とつながれるステキな物だと実感しました。
- ・他の人の出す音をよくきいたり、他の人と音を合わせたりすることが、とても楽しかった。

上記学生の記述から、グループ活動の中で音楽を楽しんでいたことがうかがえる。そしてグループにおける他者との相互作用や互恵的な協力関係も育まれていたのではないかと考えられる。

- ③「音楽教育では、誰もが創造的に音楽に取り組んでいけるようにしなければならない」

- ・この授業では、自分のイメージで、自分の好きなように表現できたという点でとても楽しかった。
- ・即興で音を作る時も授業をする度に上手になっていく気がしました。音楽ってこんなに楽しいんだと気づき、保育者になってぜひ子どもと音楽であそびたいと思いました。
- ・初めは苦手な事柄である「創造」と「表現」が入っているこの授業がとても嫌でした。でも始まってみると思っていた授業内容とは違って、毎回何ができるか楽しみでした。
- ・何もないところから1から作り上げるのも楽しかったです。
- ・こんな表現の仕方もあるんだと、驚くところも沢山ありました。でもやっていて本当に楽しかったですし、この授業で行ったことをどこかに繋げていきたいです。
- ・自分が自分の中の奏でたいリズムがわかってきて、

面白いリズムや自分らしき全開のリズムができるようになったときは嬉しかった。

- ・子どもたちが思ったことを音楽を通じて表現できるような保育をしてみたい。
- ・授業でやった音楽表現だけでなく、まだまだ色々な音楽表現があると思うので、見つけていきたいと思うし、保育現場でも生かしていけたらいいなと思います。
- ・自然と周りの動きや周りの子が出している音を聞き、合わせようとか、このリズムだったらこんなリズムを叩いた方がうまくかぶせられるなど、自然に周りの音を意識できるようになっているなと感じました。

上記学生の記述から、自己肯定感を持ち、創造的に音楽と楽しく関わっていたことが見受けられる。さらに探究心や保育者としての観点も養われていたと思われる。

5. まとめ

本研究では、3つのオルフ教育の理念を柱とする授業実践を考察し、アクティブ・ラーニングである「能動的学修」が行われているのかを探索的に把握することを目的とした。そして音楽を心から楽しみ、創造性豊かに音楽と関わりながら、能動的、主体的に音楽を学ぶことを音楽教育におけるアクティブ・ラーニングとした。

その結果、音楽を心から楽しみ、創造性豊かに音楽と関わりながら、能動的、主体的に音楽を学んでいたことが示唆された。このことからオルフ教育はすでにアクティブ・ラーニングと言えるのではないだろうか。近年アクティブ・ラーニングが積極的に推進される中、さらに様々な音楽教育現場でオルフ教育の可能性を探ることが課題である。

能動的、主体的な学びへの姿勢を引き出すためには、学生から生まれる様々な表現をまず受け止めること、認めること、そして指導者がそれに対して真摯に反応を示すことが必要ではないかと感じている。このことは自己肯定感を育み、さらに信頼関係にもつながると考える。自己肯定感を育むことや信頼関係を持つことは、アクティブ・ラーニングの土壌にもなるのではないだろうか。

今後は日本音楽教育学会が行ったアンケート調査の「なぜぼくは音楽が好きか。それは音楽は芸術だからです。」という言葉にもあるように指導者もさらにアクティブに「芸術」と関わっていくことが重要な課題でもあると考える。

本研究は日本オルフ音楽教育研究会『音と動きの研究』の学会発表報告「オルフ教育の理念に基づくワークショップ型授業」を加筆、修正したものである。

参考・引用文献

- 1) これらの答申は文部科学省の HP に掲載されている。「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm (2012 年)
「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1365665.htm (2015 年)
「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1380731.htm (2016 年)
- 2) 「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」用語集 http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_3.pdf (2017 年 9 月現在)
- 3) 「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm (2017 年 9 月現在)
- 4) 溝上慎一 (2015) 「アクティブラーニング論から見たディープ・アクティブラーニング」『ディープ・アクティブラーニング』松下佳代 編著 勁草書房 p.32
- 5) 同書 pp.33-34
- 6) 新山王政和 (2016) 「音楽についてこう考える、こう言いたい」学習者アンケート Web 調査の分析—子

供にとって音楽は「アイデンティティやコミュニケーション」のツール『音楽教育実践ジャーナル』vol.13 no.2 p.9

- 7) 同書 p.19
- 8) 「音楽についてこう思う!!」「音楽について言いたい!!」学習者アンケート結果 http://日本音楽教育学会.com/pdf_files/view/165 「音楽についてこう思う!!」「音楽について言いたい!!」こと (2017 年 9 月現在)
- 9) 柴田礼子 (1990) 「オルフ研究所 レーグナー教授にきく」『季刊音楽教育研究』第 63 号 音楽之友社, p.162
- 10) 同書 p.163
- 11) 同書 p.163
- 12) ハーバード・リード (1955) 『モダン・アートの哲学』宇佐見英治・増野正衛訳 みすず書房 p.10

註

1. 「アクティブ・ラーニング」「アクティブラーニング」などと用いられているが本稿では文部科学省の施策用語である「アクティブ・ラーニング」を使用した。
2. レーグナーの解釈によるオルフ教育の理念
レーグナーは 1989 年 12 月 7 日、ザルツブルクのオルフ研究所において柴田のインタビューを受けている。そこでオルフ教育の理念について解説を交えつつ語っている。以下にレーグナーにより 5 つに分類されたオルフ教育の理念を示す。
・音楽教育は母国語と共に、母国語によって始まる。
・音楽、踊り、言葉、そしてその他の芸術を一つの分野として認知する。
・音楽教育において、子どもたちは皆、すべての音楽的パラメーターを体験する為に、楽器の演奏も学ぶべきである。
・「音楽を楽しむ」ということは、個人的な体験だけでなく、グループ体験でもあるべきである。
・音楽教育では、誰もが創造的に音楽に取り組んでいけるようにしなければならない。
柴田礼子 (1990) 「オルフ研究所 レーグナー教授にきく」『季刊音楽教育研究』第 63 号 音楽之友社, pp.160-164
3. 「音楽についてこう思う!!」「音楽について言いたい!!」学習者アンケート結果 http://日本音楽教育学会.com/pdf_files/view/165 (2017 年 9 月現在)